

# 指導助手の導入による学力保障の試み

## 一品川区立荏原第三中学校

楚 阪 博

### 1. 中学生の学びの問題点

前職の頃から、学習のつまずきということ自分のライフワークのようにしてきました。現場に戻って2年になります。かつて教育行政にいたこともあって、現場を見ていて「こんなことをやりたいなあ」「こんなことができるといいなあ」と思うことがあったのですが、後でお話する品川区の「プラン 21」という事業が展開し、自分の考えるものができそうということから、今日お話する内容のことを始めました。そこで見えてきた課題について、これから順を追ってお話していくことにします。現場にいる立場から普段現場で思っていることを述べさせていただければと思います。

まず、「数学の基礎学力が本当に低下しているのかどうか」という問題についてですけれども、都全体、公私全部入れて考えると、中学生の能力としてはそう変わっていないだろうと私達は考えます。彼らは同じようなつまずきをしていますし、同じように手当てをすれば同じようにわかっていきます。能力差の両極分化が問題で、下の方にいる子ども達がとても厳しくなっています。もう一点、子ども達は3年生になると塾に通い始めます。今現在の学校では、1、2年生の塾通いは少ないですが、かつて小学校で受験を失敗して入学してきた子ども達は、知識としては入っていて、既知事項を壊すことから始めないと再構築ができないということに私達は苦勞しました。今は、それを壊されることを拒否する子どもが出始めています。「もうわかっているんだからいいんだよ」と言い、学ぶこと自体を拒否する子が出始めています。

学ぶ子ども達の姿勢は、「できればいいじゃないか。結果が合っていればいいじゃないか」と早く結論を求めることにこだわって、考えることや見直すことはしません。また、計算については、途中の計算過程をき

ちんと書いていくことが大事だと思うのですが、計算は書きません。それから、中学校の中でこの基礎学力の問題としてやはり大きな比重を占めているのは受験ではないかと思っています。すなわち、学習指導要領で示されている内容を理解しているかどうかということを受験で判定されるわけですから、それだけが重要であるというような意識が教員の中に働いているのは否めないと思っています。

現場サイドの私にとっては、基礎学力についてもう一度きちんと明示していただく必要があるのかなという気がしました。特に、知識、技能の面ではなくて、やはり一番問題になっていくのは、関心とか数学が嫌いな子どもとか、学ぼうとしなくなってきているという意欲の問題で、そのあたりにスポットを当ててどうしなくてはいけないかということを考えないといけないのではないかと思っています。

### 2. 学習の個別化の実践

次に、基礎学力、特に知識や技能に関して今までどんなことをしてきたか、自分の実践を述べていきます。特に私は一斉指導の中でどれだけ個別化できるかということ課題としてきました。ですから、毎時間とにかくプリントを作りました。プリントは3枚ぐらい、できるだけスモールステップで作っていき、必ずそこに計算過程を残せるような形にしました。間違っただけにはやり直しをさせ、もう一回宿題にして再提出をさせるということを繰り返してやってきました。

もう一つは、個別化をはかる意味で、生徒に生徒を教えさせるというシステムを取り入れました。授業開始と同時に小テストを行い、生徒同士の相性なども把握しながらその学習の場面場面でこの子なら大丈夫だろうという子を派遣していくという形をとりました。これらは一斉指導をする中での工夫といえます。

それから3番目には、やり直しの徹底を行いました。

授業中はプリントをたくさん使っていますから、残ったものは宿題として必ずやってこさせるようにしました。

4番目には、朝の補充学習です。本当はつまずきを持っている子に教えたいのですが、そういう子はなかなか来てくれません。最初は20人ぐらい来るのですが、最後まで続くのはやはり「できる子」です。どちらかというと公立の場合は、授業の中で「できる子」への対応というのは難しいので、授業以外の時間でどうするかということを考えていかなければならないと思います。

それから、5番目には、夏季補充学習を実施しています。これは、一人でも多くの生徒を指導できるシステムを工夫しました。中学校で学習する3年間の計算の内容を各内容ごとにA、B2タイプのドリルを作成し、解答も用意しておきます。A問題をまず解かせ、自己採点をさせたものを出させ、まちがいをやり直させ、再度B問題で理解できたかを確かめることを行い、次のステップへ行かせるという方法で指導してきました。

そういう中で定着を困難にする3つの要因について述べます。一点目は能力差が拡大しているという点です。やはり一人ではなかなか手が回りません。二点目は、今の子ども達は自分でわからないことが困るとか、わからないことが恥ずかしいという意識が薄くなってきている気がします。「いや、わかんなくてもいいよ。困らないよ」という意識が暗黙のうちにどんどん広がってきていて、学習の意義というのか、学ぶことの良さが少し薄くなってきているような気がしています。それから三点目は、本来子どもはわかると、小学校の時ならば「わかった!」という爆発的な喜びを表現するのですが、中学校になるとなかなかそのような喜びの表現をしなくなってきます。中学生同士の中では、目立ちたくないという心理が働き、学習することがあまりおもしろくないということになっているのではないのでしょうか。ですから、子ども達に喜びを味わわせてあげるためには、ぱっと目と目を合わせて、「お! わかったな。それでいいよ」と自信ある表情で認めてあげることが唯一残された方法のように思います。

### 3. 品川区の「プラン21」

次に述べることは、なかなか言いにくい部分であるのですが、公立中学校の実情として、学校というのは

本当になかなか変わらないという点です。そこで、最初に触れました「プラン21」についてです。これは、学校がなかなか変わらないという状況の中で、これから新しい教育改革を進めていく上で、学校自体を変えなくてはいけないだろうということです。

そのために、実際どんなことをやっているのかというと、まず有名なところでは、学校選択制を取り入れています。昨年度が小学校、来年は中学校を選択するというような形になってきました。それを小中レベルで見えますと、小中共通に「個別学習推進校」があります。中学校には習熟度別の学校が3校ありますが、実質上今、順調に動いているのは私のところだけという状況です。

二つ目は、これは小学校のみですが、教科担任制の推進校があります。また、小中一貫教育ということで連携をすすめています。さらに、国際理解教育に力を入れ、特に小学校では英語の教員を入れるというようなことを行っています。それから、中学校では、社会人と一緒に学ぶという公開講座も行っています。その他としては、情報教育に力を入れている学校も2校あるという状況です。このように、区内の小中学校の大体6割から7割近くの学校が、なんらかの形でこのプランにかかわっています。1年間でもどこまでの成果をあげられるのかはまだわかりません。

### 4. 教員と生徒の意識改革

学校は教員と生徒から構成されていますから、学校が変わるには教員の意識改革が必要になってきます。授業改善の必要性をどう認識させるかということです。そのためには、教員が休みますと、私も数学の授業に出て行きます。若い教員がいれば「どうぞ」と授業を見せます。昨年度は全校で習熟度別を1学年4クラスに分けて全員でやりました。それから、教員に自己申告をさせると、「よくわかる授業」と書くのですが、わかる授業とはどういうことなのかということをもう少し教員の感覚として捉えさせたいと思っています。

やはり、生徒全員が自分でやろうと思ってやっている時、充実感を持っていると思います。その状態を自分で体感しないことには、どんな授業だったらいいいことにはなかなか難しいでしょう。そのように考えていくと、なかなか教員一人では手が回らないので、気になる生徒のところに行ってその生徒の学習を手伝ってくれる人が教室にいれば、楽になるのではない

かと思われます。そんなところから教員の意識を変えたいと私は考えています。

生徒側の意識改革としては、二つあげられます。一つ目は、今の子ども達に「学び方」をやはりきちんと学ばせなければならぬだろうということです。学び方を知ることによって意欲がわくでしょうし、基礎学力を定着させることができるのではないかと考えたのです。二つ目は、特に習熟度別に分けた場合に、Aグループの子たちは本当に授業の内容を理解するのに一時間全部かかってしまう子ども達ですが、4コースに分けて4人で入りますと、そこでどんなにかかっているか、他の子達にも目が届くわけです。Aの中にはスローラーナーという生徒がやはり何人かいますが、最初のところだけハードルを越えさせてあげると、あとは全く質問なしでぐんぐんB、Cという具合にレベルが上がっていくのです。また、「俺、Aよりはわかるぞ」と感じている子ども達というのは、教員から見れば本当はAなんだけれどもAに来ない子どもであり、こういう子達を慌てさせるという一つの機会にもなるのではないかと考えられます。このようにして、生徒の側の意識も変えたいと考えたわけです。

## 5. 指導助手の導入

このようなことから、特に指導助手を使う形の中でこれから学校に必要なものは何かということを考えてみました。今、文部省では、習熟度別とか学級定数を減らすと言っていますけれども、要するに減らすだけでは解決はしないだろうと私は思っています。そうではなくて、学びたい時にかかわってくれる人がすぐ身近にいるかどうかということが重要であり、こういうシステムをどう作り出すかということの方が求められものではないかと思ひます。今までの学習指導観と全く違う発想をしていかないと難しいのではないかと考えられます。

もう一つは、「指導助手派遣制度」の必要性の問題というところで、TTは授業で使われるものですが、授業場面の中での指導助手ということも考えられます。特に中学校の数学の授業においては、一年生に正負の数を教える時に特に重要になってきます。今ちょうど全体学習を終えたところで、いわゆる学習の理解度を診断するところで指導助手が入っていますが、本当は指導助手を授業の場面場面で入れたいと思っています。正負の意味をきちんと把握する所や、代数和に入ってくる部分、それから正負の四則混合計算の部

分で、小学校で計算の順序をやっているにもかかわらず、負の数が入ることによって混乱が生じています。そのような部分のところでもう一回きちんと確認しながら押さえていってあげることが必要になっていきます。

あともう一つ大きなポイントとなるのは、文字の部分です。また、図形の論証の論理の部分でも必要ではないかと思っています。思考力や論理性や数学的な考え方の力をつけるために、日々の授業の中でクリアさせなければいけない部分のところをカバーできるシステムをつくれれば、何か変えていけるのではないかと考えています。

本論文は、2000年度第2回プロジェクト研究会(2000年7月28日)に話題提供され、学校臨床総合教育研究センター年報『ネットワーク第3号』(2001年3月31日発行、Pp 14-16)に掲載されたものである。